

病と健康をめぐる

中野重行 ニンゲン学

死について考えること
は、限りある生について真
剣に考えること

この世の生きとし生ける
ものは全て命に限りがあり
ます。人間にも寿命がある
ことに例外はありません。
現代のように医学が発達す
るまでは人の死は日常の中

にあり、死そのものが身近
に感じられていました。死
を祭る儀式や埋葬する墓が
大切にされたのもそのため
です。宗教も死の問題を考
えないものではありません。

また、死についての哲学的
な思考も深めました。
近代科学とともに西洋医

らげる医療を目的にするホ
スピス施設(緩和ケア病棟)
が誕生した1960年代後
半からです。その後、ホス
ピスの数が増え、80年代か
らは、死について公の場
でも議論する機会が増えまし
た。同時に死に直面し、乗
り越えた患者が闘病記を出
版することも多くなりました。

同じころ、死について研
究する学問として「タナト
ロジー」が誕生しました。
タナトロジーはギリシャ神

使ってがんを治療する施設
にメディポリス国際陽子線
治療センター(鹿児島県指
宿市)があります。センタ
ーは、体に優しい、闘わな
いがん治療を方針に掲げて
います。私は2011年か
ら昨年未まで、毎月1回、
センターでがん患者とその
家族と一緒に心の内を話し
合う「響き合いトークセッ
ション」を主催しました。

その中で、がんとなったこ
とで生の尊さを実感し、ラ
イフスタイルを見直すよう
になった人を多く見てきま
した。

死から生を見つめ直す

天から預かった命、大切に

学が発展していく中で、治
療を受けて死を避けたいと
いう人間の願望が強くな
り、医学は死を直視するこ
とを避け、一日でも命を延
ばす延命が使命であると考
えるようになりました。そ
の結果、医学界は医学教育
で死を教えなくなり、敗北
と捉えてタナーとしてきた
ところがありました。

話が死の神「タナトス」か
ら付けられています。国内
でのタナトロジー普及に尽
力した上智大学のアルフォ
ンス・テーケン元教授は「死
生学」と訳しています。
「死」から目をそらさず
に考えることは、「生」に
ついて考えることです。生
と死はコインの表と裏の関
係と同じで、切り離して考
えることはできません。

一般に命について考える
時、「天から授かった命」
と言いますが、実際には「天
から一時的にお預かりした
命」なのではないでしょう
か。天から一時的に預かっ
た命を大切に使い切って
(天寿を全うして)、最期
の時が来たならば、そっと
天にお返ししたいもので
す。死について考え、限り
ある自分の生を見つめ直
し、生きることを大切にし
てほしいものです。

(大分大学名誉教授、元
同大病院長)

— 随時掲載 —

死への考え方が変わり始
めたのは、痛みや苦痛を和

放射線の一つ、陽子線を